

第一次 入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校

2024. 1. 8

〔問題二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

外出したさい、ちょうどお昼なので、その辺で昼飯を食べようと思ったら、ラーメン屋が [a] に留まった。ラーメンもいいが、もつとほかに美味おいしいものがあるかもしれない。そう思って、つぎの店を探す。すると、そば屋が [a] に入った。そばか、それもいいけど、もう少し探してみよう。こうして洋食、とんかつ、お好み焼き、等々、いろいろな店をめぐるが、結局、どれもいまいで、決められない。探せば探すほど、Aヨケイに迷ってしまう。最後は、もう何でもいいや、と違って、眼めの前のラーメン屋に入る。そうしたら、そのラーメンはいまいちだった……。

① こんな失敗をしないためには、あらかじめ周辺にどんな店があるのかをよく調べ、腹の減り具合や懐ふところ具合を勘案かんあんして、どの店で何を食べるかをしっかり決めておかなければならない。このような計画を Bジゼンに立てておけば、昼飯を求めて当てもなくさまようというような愚ぐは避けられる。

このように計画はたしかに重要である。よく計画してから行動せよと言われることも多い。しかし、なぜ計画は重要なのだろうか。あらためて考えてみよう。まず、その [b] で考えたのでは間に合わないケースがある。「泥縄どろなわ」という言葉が示すように、泥棒どろぼうを捕つかまえてから縄をなっているのは、泥棒に逃にげられてしまう。泥棒を捕まえたかどうかをあらかじめ考えて、縄で縛しばることにするなら、縄をなうて用意しておかなければならない。事が起こってから対策を考えようとしても、十分考える時間はないし、いい対策を思いついても、準備する時間がない。まさに ②「泥縄どろなわ」の対応になる。

また、計画を立てないと、せっかく行ったことが無駄むだになることがある。今夜は、コーヒーでも飲みながら、本を読もうと思つて、コーヒ豆を買つて帰る。しかし、コーヒミルを探してみると、どこにも見当たらない。そういえば、古くなったので、先日、ゴミに出したのだとハタと気づく。挽ひいてある豆を買うべきだったと後悔こうかいしつつ、仕方なくお茶をいれて飲む。せっかく買ったコーヒ豆は無駄むだになってしまふ(腐くさるものではないのでとってはおけるが)。

さらに、計画を立てないと、やったことが無駄むだになるどころか、邪魔じゃまにさえなることがある。家具の配置はいち換えをしようと思つて、机や椅子いす、本棚ほんだなを動かしてみる。しかし、やみくもに動かしたりすると、たとえば動かした机が邪魔じゃまになって、そこに本棚を置くことができなかつたりする。そこで、仕方なく、机を元の位置ちどに戻す羽目になる。家具

の配置換えは、結構複雑な作業だ。行き当たりばったりでは、ある移動が過ぎの移動の邪魔になることがある。どれをどの順に移動するか、ジゼンのしつかりした計画が必要だ。

「机上の空論」とか「下手の考え休むに似たり」という言葉があるように、現実と噛み合わない思考は、空転するばかりで **C** に立たない。しかし、現実としつかり噛み合った思考は、きわめて **C** ユウヨウ である。家具の配置換えを計画的に行うには、部屋の図面を書いて、どこに机や椅子、本棚を置くかを書きこみ、それらをそこに移動するために、どの順にどのルートで動かすかを具体的かつ詳細に決めなければならない。それはまさに「机上」で綿密に行わなければならない。③ そのような「机上」の緻密な計画があつてはじめて、効率的な配置換えが可能になる。

もちろん、計画を立てるには、それなりの時間と労力がかかる。場合によっては、とくに計画を立てずに、④ 適当 に場当たりにやったほうが早く楽にできるかもしれない。汚れた食器を洗浄機に入れるとき、どれをどの順にどこに置くかをあらかじめ決めるのは、非常にむずかしい。そんなことをあれこれ考えるより、適当に入れて、うまく行かなければやり直すようにしたほうが、はるかに早いし、楽である。

とはいえ、たいていは計画的にやったほうが効率的である。家具の配置換えについて計画を立てるのは、なかなか手間暇のかかる作業だが、計画を立てたほうが早く楽にできる。重たい机や本棚を動かすのは時間と労力がかかるし、それを何度もやり直すのは耐えがたい。そのような試行錯誤を図面上で行うことができるのは、私たち人間の恵まれた **D** サイノウ だ。計画はそのようなサイノウを活かした人間 **E** ドクジ のすぐれた営みなのである。

たしかに計画は重要だ。しかし、読者のみなさんもおそらく **d** に染みているように、どれほど緻密に計画を立てても、必ず想定外のことが起こる。

たとえば、さまざまな可能性をよく考えて周到に計画を立て、そのうえで銀行強盗を執行したとしよう。ところが、銀行の床にたまたまバナナの皮が落ちていて、それで滑ってあっけなく捕まってしまう。もちろん、バナナの皮が銀行の床に落ちていることはまずないが、その可能性はけっしてゼロではない。完全な計画を立てようとするれば、どれほど確率の低い出来事でも、それが生じたときの対策を考えておかなければならない。

しかし、生じる可能性のあることは、きわめて確率の低いものまで含めれば、ほとんど無限にあると言ってよい。

たとえば、銀行強盗中に、赤ちゃんが突然泣きだして、その声で外にいる仲間と連絡がとりづらくなるとか、行員の尋常ならざる悲鳴に驚いて腰を抜かす、運転を誤った車が銀行に突入してくるなど、可能性は低くても、けっして起きないとは言えない。さらには、ミサイルの飛来や隕石の落下といった出来事すら、確率はゼロではない。このようなほとんど無数の起こりうる事柄をすべて考慮することは、私たち人間には実際上不可能である。

したがって、⑤どれほど緻密な計画を立てるとしても、きわめて確率の低い事柄は無視せざるをえない。ミサイルの飛来や隕石の落下は、確率がゼロではないとはいえ、起こらないものとして考慮の外に置くほかない。

ただし、厳密に言えば、どの事柄を無視するかは、それが生じる確率だけで決まるわけではない。生じる可能性のある事柄のうち、銀行強盗の成功を大きく妨げるものもあれば、そうでないものもあるだろう。つまり、事柄によって、それが生じたときにどれだけ成功を妨害するかが異なる。これを「妨害量」の違いとよぶことにしよう。妨害量の大きい事柄ほど、それが生じたときに成功を大きく妨げる。

銀行強盗中にバナナの皮ですべって転ぶことは、きわめて確率が低いとはいえ、それが生じれば、ほぼ確実に捕まる。したがって、その妨害量はかなり大きい。これにたいして、行員の尋常ならざる悲鳴は、ある程度の確率で起こるとはいえ、それほど銀行強盗の遂行に支障を来さないだろう。したがって、その妨害量はあまり大きくない。

⑥このような妨害量が、どの事柄を無視するかに関係してくる。バナナの皮による転倒が行員の尋常ならざる悲鳴よりもはるかに確率が低いとしても、それらの確率とそれぞれの妨害量を掛けあわせた値（妨害の「期待値」とよばれる）は、バナナの皮による転倒のほうが大きいかもしれない。そうだとすれば、バナナの皮による転倒のほうが、銀行強盗の成功をより大きく妨げることになる。そうであれば、行員の尋常ならざる悲鳴を無視して、バナナによる転倒のほうを考慮に入れることになるだろう。つまり、どの事柄を無視するかは、その事柄が生じる確率だけではなく、その確率と妨害量を掛けあわせた値（つまり妨害の期待値）によって決まるのである。

以上、厳密を期すために、少し込み入った話をしたが、ともかく重要なことは、どれほど緻密な計画を立てるにせよ、完全な計画を立てることは不可能だということである。起こる可能性のある事柄はほぼ無限にあり、そのすべてを考慮することはできないから、一部の事柄は起こらないものとして無視するしかない。つまり、想定外とするしかない。しかし、想定外の事柄も、生じる確率がゼロでない以上、起こりうる。そして、もしそれが起これば、計画は

おそらく失敗するだろう。したがって、絶対に失敗しない完全な計画を立てることは不可能なのである。そこには、計画を立てることは重要だが、完全な計画を立てることはできないというジレンマがある。このことはよく **e** に入れておいたほうがよいだろう。

(信原幸弘『覚える』と『わかる』より)

(一) 〓 線部 A～E のカタカナを漢字に改めなさい。

(二) **a** **e** に入る言葉をそれぞれ漢字一字で答えなさい。ただし、**a** は本文中に二つあります。

(三) 〓 線部①「こんな失敗」とほぼ同じ意味を表している部分を本文中から二十二字でぬきだし、最初と最後の三字をそれぞれ答えなさい。

(四) 〓 線部②『泥縄式』の対応」を説明するための例として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 修学旅行に向けて下調べをしていたら、興味深いことが次々に見つかり、それらのことを調べているうちに、いつのまにか出発日が近づき、すべてについて調べ尽くすことはできなかった。

イ ある友だちとけんかをしてしまったが、仲直りをしたいと思い、別の友人にあいだに入ってもらおうと考え、事情を話してみたら、そういうことは引き受けられないと断られてしまった。

ウ 夏休みが終わり、今日から学校が始まるという日の朝に、あらためて夏休みの課題を確認してみたら、読書感想文の課題があることがわかり、あわてて感想文の対象にする本を探し始めた。

エ 明日は遠足の日だが、天気予報では「明日は晴れ」ということなので、きっと遠足は実施されるだろうから今日出された宿題にはまだとりかからなくてもよいだろうと思いながら床に就いた。

(五) ———線部③「そのような『机上』の緻密な計画」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目的を達成するために、起こりうることを完全に予測して、成功の障害になりそうなことはうまく処理できるように考えぬいて立てた計画。

イ 何かをしようとするときに、失敗を避けるためにできるかぎり多くの正しい情報を集め、実際の場面をこまかいところまで想定して練り上げた計画。

ウ 予想されるあらゆる事態を可能な限り洗いだして、それらの事態が起きた状況を実際につくりだして解決法を考え、予定通りにすべてものごとが進むように立てた計画。

エ あることをなしとげるために、その計画にかかわっている人が集まり、率直に意見を出し合って議論し、多角的な視点から検討することによって生まれる完全な計画。

(六) ———線部④「適当に場当たり的にやったほうが早く楽にできる」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先の見通しを考えるような面倒なことはしないで、とにかくゆきにまかせて行動した方が手間がかからない。

イ ものごとはあまり深く考えないで、その時に思った通りに進めた方が成功する確率が高い。

ウ これから起こることを想定するよりも、現実起きたことにその都度対応した方がよい。

エ 将来を予測することはむずかしく、世の中はなにもかも不確実なものだと開き直って行動するぐらいがよい。

(七) ———線部⑤「どれほど緻密な計画を立てるとしても、きわめて確率の低い事柄は無視せざるをえない」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いくら精密な計画を立てても、それを実行できるかどうかは費用との関係によることだから。

イ 人間には未来を予想する能力があるが、それを過信するあまり、自分がまちがえるわけがないと思いきんでしまうから。

ウ だれもが完璧な計画づくりをめざして努力をするが、すべての出来事を予想しつくすことは不可能だから。
エ 計画を正確にしようとするればするほど、それにともなって考えることも多くなり、かえつてものごとが前に進まなくなるから。

(八) ———線部⑥「このような妨害量が、どの事柄を無視するかに関係してくる」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 計画を実行しようとする際に、どの程度計画の妨げになる事柄があるのかを見きわめることで成否がきまる。
イ 計画の中にふくまれる一つ一つの具体的な事柄には重要度の違いがあり、それに応じて実行する手順がきまる。
ウ 成功を妨げる可能性のあることが起こる確率と起こらない確率とを比較することによって、計画を実行するかどうかきまる。
エ ものごとを成功させようとするときに、ある事柄がどの程度成功を妨げるのかという違いによって、それに注意をはらう必要の有無がきまる。

(九) ~~~~~線部「下手の考え休むに似たり」は、ここではどういう意味を表していますか。句読点や記号もふくめて五十字以内で説明しなさい。

〔問題二〕次の小説の主人公小柳レモンは、母親（木綿子さん）が倒れて入院したと聞いて驚き、隣人の時田翼が運転する車で病院に駆けつけました。そこで義父（小柳さん）から盲腸だと聞かされ、拍子抜けしたレモンは遅い夕食を母の病室で食べたところです。この文章を読んで後の問いに答えなさい。

音がしないように、ゆっくりゆっくり食べ終わったお弁当の容器をビニール袋に入れてある小柳さんとあたしは、一メートル以上の距離をA空けて長椅子に腰かけている。歩く時でも、そうだ。家の中でも、外でも。

あたしと小柳さんは、常に、この距離を保っている。保たなければならぬ。

結婚してすぐの頃に、いきなり「お父さん」とは呼べないだろうから、と小柳さんは言い、まずは友だちにならな
いか、とあたしに提案してくれたのだった。初見で冴えないおっさんだと感じた小柳さんは、話してみると楽しいお
っさんだった。ものすごく真剣に話を聞いてくれるし、中年なのに説教じみたところがないし、かと言ってあたしの
機嫌をとうとうとするようなことは一切しなかった。

あたしはたぶん、ちゃんとした大人からはじめて対等に扱われて、すごくうれしかったのだと思う。①母はあたしと「対等」ではないから。

小柳さん好きだな、と思った。だって小柳さんは母のことが大好きだから。母をなによりも誰よりも、大切にしてくれている、と傍で見ていてわかるから。

あんまりお義父さんにべたべたしたらだめよ、と例の近所のおばさんに言われたのは、ふたりが結婚して数か月後のことだった。べたべたなんて、していなかった。だってあたしはもう十七歳だったのだ。小さな子どもではない。小柳さんともただ、普通に仲良くしていただけだ。一緒にスーパーマーケットに行く程度のことを「べたべた」なんて言われて、ほんとうにもものすごくびっくりした。

そのおばさんは結婚直後に「レモンちゃん、あんたこれからも『小柳さん』って呼ぶの？ そんな他人行儀な呼びかた、どうなのよ？」と言っていた人でもある。

「べたべたなんてしてない、あたしは、他人行儀じゃなくなろうとして、だから」と答える声は震えていて、とても小さくて、おばさんには届かなかった。おばさんは眉をひそめ、でもくちびるはだらしなくゆるませて、こう続けた。

「あんたはその気になれば、小柳さんと『そういう仲』になれるんだからさ。男と女なんだから。あんまりべたべた

仲良くしてたら、へんな噂が立つかもしれないよ。木綿子さんだって、心配するだろうし。おだやかじゃいられないよねえ。だって自分よりずっと若くてかわいい女が同じ家の中にいるんだもの」

「他人の事情にあれこれ口を出す」は「本人のいないところで噂をする」に並ぶ、無料でたのしい娯楽のひとつだ。②あたしたちは、おばさんの娯楽として消費された。

ピノキオが嫌いだ。あいつは人形からちゃんど人間の男の子になれた。ゼペット爺さんのほんとうの子どもに。だけどあたしは違う。小柳さんのほんとうの娘にはけっしてなれない。

母が夜勤で家を空ける日は、あたしは友だちの家に泊まるようになった。小柳さんとふたりきりにならないように。小柳さんからなにかされるかもしれないと警戒していたわけではない。でも家にふたりでいると、周囲の人に邪推する余地を与えてしまうから。

友だちみんなの都合が悪ければ、これまで以上にファミリーレストランでひとり時間を潰すようになった。髪を染めて、なるべく派手な服を着て、時々学校をさぼったりした。吸いたくもない煙草を吸った。そうすると、いとも簡単にあたしは近所の人たちや学校の先生から「母親の再婚により、居場所を失って非行化した女の子」として扱ってもらえるようになった。やさしく理解ある B の父に勝手に反発している女の子だ。誰も にせず済む、いちばん良い方法だと思っていた。

そういえば、さっきのおにぎりの代金を小柳さんに払わせて、そのままにしていた。小銭を出そうとすると、小柳さんは笑う。

「ばかだなあ。いいんだよ、そんなの」
「でも」

なおも財布を探るあたしに、小柳さんが「だって仕事、辞めちゃったんでしょ」とことさらに小声で言った。クビ、というあたしの表現をそのまま採用しないところが、③小柳さんらしい。

「お金貯めるんですよ。……節約しなきゃ」

そうだ。あたしは、車を買わなければならぬ。けど、それより先にまず、家を出るべきだと思った。

「あたし家、出ていく」

まずどこかにアパートを借りる。そのためのお金に充てよう。ほんとうはもつとはやく、そうするべきだったのだ。えっ、と小柳さんが目を丸くする。

「な、なんで？」

なんで、え、なんで？ 小柳さんはおろおろしている。

④ 小柳さんがお父さんじゃないからだよ、と答える声が震えないように、必死で気をつけた。泣いたりしたら、小柳さんが心配するし、母が起きてしまう。

すこし口を開いて、顔をこちらに傾けて眠っている母の顔を見つめる。あらためて見ると、やっぱり以前より、老けた。額の生え際あたりがずいぶん白くなっている。

人は死ぬ。かならず死ぬ。小柳さんと母とどちらが先に死ぬのだろう。もし今すぐに母が小柳さんより先に死んだら？ そう考えるとやっぱりあたしは家を出なければならぬ。小柳さんとふたりで暮らすわけにはいかないのだ。

* ビバーチェの店長に頭突きをしたのは、小柳さんのことを言われたせいだ。

「小柳さんって、お父さんと血が繋がってないんだってね」

テーブルの片づけをしている時に突然隣に来て、言われた。誰かから聞いたらしい。あたしは時田翼と女の会話を盗み聞きしようと必死だったので、無視した。答える **B** もないし。

店長は無視されたことはまったく気にしていない様子で、ニヤニヤしながら「なんかさあ」と続けた。なんかさあ、そういうのってやらしいよね。深夜、わたしの寝室に義父が忍びこんで来て……みたいなやつ、あるよね、漫画とかでさ。だって再婚したの小柳さんが女子高生の時だったんでしょ。女子高生だもんね、やっぱりね、絶対やらしい目で見ちゃうもん。男ってそういうもんだからさ。小柳さんが目当てでお母さんと結婚したって可能性もあるよね。あるよ、うん。

ねえやっぱり、お風呂とかのぞかれたことあるでしょ、一回ぐらいはさー、という言葉がすべて終わらぬうちに、あたしは店長の鼻めがけて頭突きをしていた。

近所のおばさんの時と一緒に思った。自分の欲求不満だかなんだかを、⑤ よその家庭の事情を娯楽として消費することによって発散するなと思った。ひとりですら楽しむぶんにはいいが、あたしに押しつけてくるな。

ぐへっというような声を発して数歩後ろに下がった店長は、お客さんがいるテーブルにぶつかって、そこにのって
いたカトラリーケースが落ちて、大きな音を立てた。店内が静まり返った。店長の鼻から血が流れ出して、急いで手
で押さえているのを、そして押さえきれずにボトボト血が床に垂れるのを、ただじっと見ていた。

(寺地はるな『大人は泣かないと思っていた』より)

*ビバーチェ……小柳レモンがアルバイトをしていたファミリールレストランの名前

(一) 線部A「空けて」とありますが、次の「□けて」の中で「空けて」と同じ読み方をするものはどれですか。次の中から
二つを選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、解答の順番は問いません。

- ア あつという間に午前五時となり、ついに夜が□けてしまった。
- イ 選手が□けてしまったので、試合に参加できなくなった。
- ウ 虫たちが生き残りを□けて戦っている。
- エ 手軽さが□けて、ヒット商品となった。
- オ もう一度店を□けてほしいという要望が多く寄せられた。
- カ 気を□けて、行ってらっしゃい。

(二)

B

 に入る語を漢字で答えなさい。ただし、

B

 は本文中に二つあります。

(三) ——— 線部①「母はあたしと『対等』ではない」とありますが、『対等』ではない」とはどういうことですか。最も適当なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母娘なので、互いを見る目が厳しくなるということ。
イ 女性同士なので、気の置けない関係だということ。
ウ 血の繋がった間柄なので、遠慮がないということ。
エ 親子なので、どうしても支配的になるということ。

(四) ——— 線部②「おばさんの娯楽として消費された」とありますが、小柳レモンがどのように感じた原因となっている部分を探し、句読点をふくめずに十五字でぬきだしなさい。

(五) に入れるのに最も適当な語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 部外者 イ 従者 ウ 当事者 エ 悪者

(六) ——— 線部③「小柳さんらしい」とありますが、ここで小柳さんが言い換えている内容を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア レモンに落ち度があつて辞めさせられたのではなく、レモンが辞めることを主体的に決めたという意味合いになっている。
イ 職を失ったせいで心に傷を抱えているレモンに配慮し、さらに傷つくことがあつてはならないと直接的な表現を避けている。
ウ 病気を抱え苦しんでいる木綿子さんを気づかなくて、レモンが前向きに歩んでいるような印象を与える言い回しに換えている。
エ お金がないことを知られて心配をかけることだけは避けたいというレモンの切実な思いをくみ取って、話をそらしている。

(七) ———線部④「小柳さんがお父さんじゃないからだよ、と答える声が震えないように」とありますが、ここでレモンの声が震

えてしまいそうになるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母がいなくなった時のことを思うと心配でたまらないのだが、頼りない小柳さんにはそれを語るに忍びなかったから。
イ 大好きな小柳さんに、自分たちが本当の親子ではないという事実を改めて突きつけ、傷つけるのは本意だったから。
ウ 「小柳さんのほんとうの娘にはなれない」と思い悩む自分の姿を、小柳さんに見せるのがいやでたまらなかったから。
エ お人好しだけれど小心者の小柳さんが、思ってもみないようなことを言われてあたふたする姿を見たくなかったから。

(八) ———線部⑤「よその家庭の事情を娯楽として消費する」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不幸な相手に手を差し伸べてやったのだと錯覚し、自己満足にひたっているということ。
イ 他の家のことが気になるあまり、興味本位であれこれ聞き出そうとするということ。
ウ 相手の境遇には何の配慮もなく、ただ自らがおもしろがり楽しむだけで終わるということ。
エ 複雑な家族状況を改善してくれる恩人として感謝されたいと思っっているということ。

〔問題三〕 次の文章は、問題二の本文に続く部分です。これを読んで後の問いに答えなさい。

お父さんじゃない、か、そうだね。小柳さんが言い、あたしは顔を上げる。

「……僕もレモンちゃんを、『娘』だとは、思っていないよ。血の繋がった娘がいらないから比較はできないけど、たぶん違う、と思うよ。だけど」

下を向いて、小柳さんがぼつりと言う。だけど、家族だよ。

「家族って、僕は、会社みたいなもんだと思う」

「……会社」

うん、と小柳さんは真面目な顔で頷く。

「会社って、ひとつの目的のために、いろんな人が集まるでしょ。みんなでそのひとつの目的を達成するために、力を合わせるでしょ」

僕はさしずめ、中途採用なのかな、と母の寝顔とあたしの顔を交互に見る。

「血が繋がってたってさ、他人だよ。親子になるのだって、きょうだいになるんだって、偶然だよ。面接や試験で集まった人間の集合体と、たいして変わらないよ。気が合わないやつも、虫 **a** 好かないやつもいっぱいいるけど、協力しなきゃいけない。仕事だからさ」

黙っているあたしをよそに、小柳さんはうんうん、とひとりで頷いている。

「……けど、会社の目的って、なにか売ったり、A リE キ出したりすることですよ。家族という組織の目的ってなんなの。わかんない」

あたしが言うと、小柳さんはまた目を丸くした。

「え。目的は、そりゃ、『生きていく』ことだよ」

生きていくって、言うほど簡単なことじゃないよ。ただ息をして、食事をして寝て、働いて、ただそれだけだったやりに通すのはおごことなんだから、と話す小柳さんの目にうっすら光るものを認めて、思わず目を逸らす。母と出会う前に、小柳さんがどんな思いで、どんなふうに生きてきたのかを、あたしは知らない。

「生きていく **b** は大事業だよ。その事業が継続できるならさ、どんな B ヘン セイ だっていいんだよ。お母さんが

三人いたって、夫婦ふたりだけだって、子どもが二十人いたって、全員に血の繋がりがなかったって、うまくいってらんならいいと思うんだよ。もちろん、ひとりだってさ」

代表取締役ひとりだけの会社だってあるもんね、と小柳さんはあくまで会社にこだわる。
だからレモンちゃん、と言いながら小柳さんがあたしを見る。

「お父さんじゃなくてもいいよ。娘じゃなくてもいいよ。だけど僕らは同じ思いを抱く社員同士なんだから、助け合っ
ってやっていけないかな」

「同じ思い……?」

あたしが首を傾げると、小柳さんは母のほうを見て「だってさ、僕らふたりとも木綿子さんが大好きだもんね！」
とウィンクをした。たぶんウィンクだったのだろう。両目ともぎゅっと閉じられてしまっていたが。

「社員か……」

あたしは呟く。

「あ。社員がかっこわるかったら、クルーでもいいよ。僕のことを誰かに『私のお父さんです』って言いたくないな
ら『うちのクルーです』って紹介したらいいんだ」

小柳さんは、とても良いことを思いついたぞ！ という顔でクルークルーと何度も言う。

「小柳さん」

「なに?」

「よけいにかっこわるくなってるから。やめて」

「……じゃあ……キャスト?」

「もう、ほんとにやめて」

小柳さん C 小柳さんでしょ、と言うと、しゅんとして俯いた。

「……あたしもみんなに、小柳さんって呼ばれてるよ」

「そうなんだ」

けっこう、気に入ってる。その呼ばれかた。あたしがそう言うのと、小柳さんはようやく笑った。

「よかった」

うん、とあたしは頷く。

「なんか、安心したし、お腹いっぱいになったから眠くなったよ」

子どもかよ、と思うようなことを、にこにこ小柳さんは言う。小柳さんは今日、ここに泊まっていくのだそうだ。

「木綿子さんをひとりにするなんて！」らしい。

「レモンちゃんは、帰って休んだらいいよ」
これタクシー代、と小柳さんが財布から取り出した千円札二枚を、しばらく悩んだすえに、どうもありがとうと受け取った。

「ちよっと僕、休憩するよ」

小柳さんは長椅子の背もたれに頭をのせて、目を閉じた。と思ったらまもなく、いびきをかきはじめて、びっくりした。嘘でしょ、とその寝顔を見る。よっぽど疲れていたのだろう。

あたしはしばらく病室に立っていた。カーテンの隙間から夜の藍色がのぞいていた。窓辺に歩み寄る。あたしたちが住んでいる家が見えるかなと思ってそちらの方角をしばらく見ていたが、わからなかった。まばらに灯る、家々の明かりは小さくて頼りない。良くも悪くも、この耳中市というまちらしい、夜の色だと思った。

家に帰らなきゃ、と思う。でももうすこしだけ、ここにいたかった。あともう、ほんのすこしだけ。

「レモン」

ベッドから、母があたしを呼ぶ。いびきがうるさくて目が覚めてしまったのかもしれない。

「どうしたの？」

ちよっと来て、と母は手招きする。枕元に立ってもう一度、どうしたの、と問う。

「もっとこっちに、顔を寄せて」

「こっち？」

内緒ばなしでもするのかと思ったなら、いきなり頬をつねられた。

「バカね」

母は泣くのをこらえているような、へんな鼻声で言い、あたしを睨にらんでいる。

「バカね、あんたって。ほんとに」

なんのこと、と答えかけて、口をつぐんだ。あたしたちの話聞いていたのかもしれない。

「お母さん」

痛いよ、と言うと、母はもっと強く、あたしの頬をつねった。

「ところで」

ようやく手を離はなしてくれた母は、長椅子の隅すみに D 無造作むぞうさくに丸めて置かれた小柳さんのコートを指さす。

「あれを、あそこで寝てる小柳さんにかけてあげてくれる？ 小柳さん」

まちがない。母は全部、話を聞いていた。寝たふり名人だなんてぜんぜん知らなかった。まだまだ知らないことがいっぱいあるらしい。あたしは「わかりましたよ、小柳さん」と答えて、ゆっくりとベッドを離れる。

(九) 〓 線部 A 「リエキ」、B 「ヘンセイ」を漢字に改め、C 「窓辺」、D 「無造作」の読みをひらがなで答えなさい。

(十)

a	く
c	

 に入れるのに最も適当な一字を、次の中から一つずつ選んで答えなさい。ただし、同じものをくりかえし用いてはいけません。

は	が	に	を	で	の
---	---	---	---	---	---

(土)

——線部「あれを、あそこで寝てる小柳さんにかけてあげてくれる？ 小柳さん」とありますが、ここで「お母さん」が語りかけていることを、次のようにまとめました。
(句読点や記号も字数にふくめます。)

□

に入る文を、本文中の表現を用いながら三十字以内で答えなさい。

レモンに、「□」と語りかけている。